

まえがき

こころの痛み。

思い返すのは高校2年生の冬、友が中学生に親友がいると唐突に話してきたのです。翌日には友は女子中学生と約束の場所に一緒に来たのを覚えています。

つなぎのデニムを着ているその子はやたらハイで掴みどころがなかったのです。結局その日は2人に振り回され面白くない1日だった記憶があります。

しかし、翌日の夕方に中学生は自ら命を絶つたと知らされたのです。

自殺の原因は父親からの虐待でした。むやみにはしゃいでいた中学生は何を想っていたのかと何度回想しても答えはないままです。

そのころから虐待のニュースをTVで見ると、こころの痛みに襲われます。こどもは無心に親を求め信頼をしているのに親がしつくと称して行う虐待。さらに親のストレス解消を小さな身が受けるときもあるのです。

確かに一晩中泣き続ける赤ちゃんをあやす忍耐、悪戯つ子のために頭をさげつづける虚しさは計り知れないとは理解できます。

だからこそ過ぎた苦勞は思い出の箱に収められさまざまな結果を出しているのではないのでしょうか。

人間界以外は、なわばり争いや群れでの行動があります。しかし我が子を虐待することがあるのでしょいか。

人間は会話を神から与えられている意味を考えると目線を合わせ親子で困難を乗り越え、互いに助け合うことが平穩な未来への予告と考えるのです。

登場人物

わたし

あの人

……

母

あのおとこ

……

母の彼氏

父

おばあちゃん

……

祖母

男子

……

わたしの彼氏

